

特集・管理の中の
子ども、教師

教育労働

——私の場合——

佐藤 守正



私の教育労働——考えてみれば四六時中教師という意識から離れられない生活であり、したがって、どこまでが教育労働で、どこから仕事を離れた私生活なのかが判然としないというのは私だけではないだろう。

夕食もそこに、明日の授業の内容を確かめ、子どもの作文に目を通し、職員会議への提案文書のワープロを打ち、教育関係の雑誌を広げ、仲間とサークルの打ち合わせなどの電話連絡をとり、明日の学校で睡魔

におそわれないためにもう寝なくちゃと思つて寢床に入るのだから、睡眠も明日の労働のための最低必要限度をいつも越えていない。

こんな生活でもそれなりに続けるのは、教育という仕事の本質的に持つやり甲斐に時折ふれることができ、それに励まされるからであろう。私の準備や意欲がから回りに終わって落胆したり、クラスの空気が沈滞して無気力になっていく子どもたちを見て、焦燥の思いにかられることは

しばしばだが、しかし、私を信頼する子どもたちの目を見ると、わかつてうれしい、できてよかったという笑みを見ると、やはり教師というのはいい仕事だなと思うのである。

一、文集づくり

新しく担任が決まったその次の日、私はいつも子どもたちに、「担任が佐藤先生と決まった日」と題して作文をかかせることにしている。

担任がどんな先生になるのか、それは子どもにとっても親にとっても一大事、春休みからそのことはずっと気にかけてきたことだし、家にかえればまっ先に親に報告し、ひとしきり夕食の話題になるはずのことである。その心の動きは作文として記録に残すねうちのあることだ。そして、読ませてもらう私にとっては、担任である私が、子どもたちとその親にどんなふうを受け入れられようとしているのか、その子の家では、子どもの提供する話題に親がどのようにに相對しているのかを知るまたとない手がかりになるからだ。

この作文は、その日のうちに目を通し、そのうちの何編かはその日のうちにプリントする準備をして、次の日の授業で読みあわせなければならない。

「その日のうち」の意味はいくつかある。まず、担任である私にとつてはなんとも興味のある作文であり、

その日のうちに読まないわけにはいかないのだ。まだ名前と顔がほとんど一致しない担任したての子どもたちではあるが、あの文をかいいた子がこの子だなとか、あんなすてきな言葉を送してくれた親の子はこの子だったのかというように、子どもの作文にその作者の顔を重ねて覚えていくという子どもの知り方ができるし、子どもと親の私にかける期待に、せいじっぱい応えねばと自分を奮いたたせることができるのだ。

また子どもに対しても、こんどの担任は、ぼくたちの作文にすぐに赤ペンを入れて返してくれるのだという事実を示すことになる。せっかく書いた作文なのに先生は読んだのか読まないのか、いつ返してもらえるのかがわからないのでは、書く意欲もしばんでしまうことになるだろう。

この作文を読み、赤ペンを入れ、何編か選んで一枚文集に編集する仕

事は、当然夜の仕事になる。質のよい睡眠をとるために、なるべく十二時を過ぎないうちに寝るようにはしているのだが、この仕事をする時ばかりはそうも言っていられない。全員の作品に評語（返事）を書いて明日返せるようにしたあと、心の動きをしつかりとらえている子、親とのいい対話があった子など、五、六人の作品を選び原紙にかきつけると一時をすでにまわっている。

文字の下手な私は、職員会議への提案文書などはワープロを使う。しかし子どもたちと読みあう文集だけは、いくら下手でも私の文字でかく。ワープロという没個性の文字ではなく、私の個性で子どもに相對したいからである。ガリ板で鉄筆を持っていた頃は、筆圧強く書くためにすっかり腕を痛めてしまったが、ファックスという便利なものが登場してからは神経痛状の痛みからも解放され

たようだ。ただ朝は、職場に一台しかないファックスの機械に同僚が群がるので、ほかの人より早く学校に着かないと朝のプリントが間に合わないという不便さはあるのだが――。

五の一・並木 奈央

担任の先生が決まる日、わたしはおきた時からそわそわしていました。／「新しく来た先生ならいいな。できれば、やさしい男の先生がいいな。」／なんて考えていました。／朝、みんなとあつても、その話でもちきりでした。／「女の先生がいいな。」／「やさしければ、どっちでもいいよ。」／「どきどきするな。」／わたしはみんなとこんな話をしていました。／校長先生が担任の先生を発表するとき、／「女の先生がいいな。」と少し思いました。／「五年一組、佐藤先生。」／「わあ、よかった、やさ

しそうな先生で。」／わたしはそう思いました。でもはつきり言つて、女の先生でもいいなと思つていたので、少しがっかりしました。／先生が教室に入ってくるとき、わたしは少し心配でした。みかけによらずこわい先生がいるからです。／「きびしそうだけど、やさしい先生だな。」／「よかった。」／近くの女の子と小声で話しました。みんないつもとはちがつて、しんけんな目つきでした。まわりをちらつと見ると、どの人もわたしが考えていることと、同じことを考えているようでした。／先生がかわるとき、なぜか不思議な気持ちです。どきどき、はらはら、そわそわ、うきうきが全部まざっているようなへんな気持ち。でも今までは担任の先生が変わってもぜんぜんこんな気持ちにはなりませんでした。どうしてかわたしでも

わからないのです。／家に帰つて、このことをお母さん、お父さんに話したら、／「それだけ、奈央が成長したんでしょ。うよ。」／と言ってくれました。／これからいろんなことがあるだろうけど、がんばろうとつくづく思いました。

立つて読む奈央の表情の晴れがましさはどうだろう。プリントを目で追いながら聞いている子どもたちの表情もまたいい。読み終えるとみんなで拍手。そのあと、ひとしきり感想を述べあう。作者に対して何か言つてあげるといふより、オレの場合はこうだとか、私のうちではこうだったというような自分を語る発言の方が多いのだが、お互いの生活と感情を交流しあう場として、作文を読みあう時間は、私にとっても子どもたちにとっても楽しい時間である。

私の家に帰ってからの時間の大きな部分は、このような作文の処理の時間として使われている。

二、居残り学習

算数の授業では、わかる、わからない、できた、できないの区別が、子ども自身にもはっきりと自覚できる。それだけになおのこと、わからなくて切なそうな表情でいる子をそのまま放置することはできない。

H男はさきほどから苦しうに頭をかかえていたが、そのうち、筆入れのふたをカタカタとあけ開めしながら、すすめるような目で私を見る。

「よし待て。この説明が終わったら行つてやるから。」と目で合図して、とにかく最後まで話し終えて行つてみれば、この前はたしかにできるようになったはずの分数の通分のやり方を忘れて、加算ができないでいる。

一言二言ヒントを与えてみたがやはりだめなようだ。通分とは何なのか、なぜそれが必要なのかまでさかのぼつてもう一度ゆっくり教える必要がありそうだ。「あとで病院をひらくから。」と言つても、彼はうらめしうな目で私を見上げるのをやめない。

Y子も遠慮がちに私を手まねきしている。そこにまわつてみると、彼女も与えた課題の最初の問題でつかえている。Y子はさきほどの説明の時はわかつたという顔をしていたのに。この子も通分の意味がわからないうのだ。全員の課題の仕上がりぶりを点検してみると、先の二人を含めて計四人は、手をさしのべる必要がありそうである。

算数の授業で、この子たちがみんなと同じスピードで歩めなくなつてからもう久しいはずである。にもかかわらず、わからなくて切ないという表情を五年生の今まで持ちつづけ

ていること、わからなくてもいいと放擲してしまわず、オレにもわかるはず、わかるように教えてくれと要求する気力をまだ持ちつづけていることが、私には、うれしい。その要求になんとか応えなければならぬ。

私は居残り学習することを、「入院する」と称している。病気になるだれもがなる。治るまで時日がかかるとすれば入院もする。居残り学習を苦役ではなく、健康になるための必要な手当てだと意識させ、だれでもが必要になれば、気楽に入れる所と思わせたためである。

とは言え、居残り学習に抵抗がないはずはない。「放課後、算数病院をひらくので、入院したい者はだれでもいいぞ。」と授業の終わりに言つておいたのだが、そのままでH男はスキーの部活へ行つてしまうだろう。まだ時々ちらつく雪はふり積もつてはいないのだが、ノルディック

スキーの選手とした期待されてもいるH男は、居残りしてまでの勉強よりは筋力トレーニングの方がいい。他の残ってもらいたい数名もやはりそうだ。

そこで、休み時間のうちにその子らに個別に接触して、「今日の算数の時間、辛そうだったなあ。こんどはすっきりとわからせてあげるから、入院するのだぞ。」と申し渡しておく。

そういう中で入院してくる患者なのだから、なんとしても入院してよかったと思わせなければならぬ。

放課後、私の教卓をかこんでノートを広げた子たちの一人ひとりに、どこでつかえているのかをまず診断する。授業の中で全体に向けての語りかけには反応の鈍いこの子たちも、個別的な接触の中では楽しそうに答えてくるし、どこがわからないでいるのか、なぜまちがうのか、その所が解明できれば、勢い込んで

計算をはじめ。まだもたついていて隣りの子に教えてやったりもする。わかってすらすと解いていく喜びを体験させることが、この子たちの次の学習への意欲を育むのだ。

しかし、こんな時ばかりではない。数字の操作のしかたを教えればできたと思わせることのできる（その意味の理解は不十分でも）分数の演算のような場合はまだいいが、「速さ」

のような抽象的な概念になると、わかったという気分させることはなかなかむずかしい。窓の外が暗くなるまで手を変え品を変えやってみるが、わかってうれいという表情を一回も見れずに終わってしまうこともある。「よし、今日はほんとによくがんばった。まだちょっとわからない所が残ったけど、君にもこんながんばる力があることを確かめただけでも今日はよかった。」と苦しみに慰めても、H男らの表情は訝

えないまま帰っていく。

幸い、体育主任が、部活の指導も自分の職務と構えてくれているので、その人によりかかってはいるが、勤務時間内に子どもは帰す、土・日はやらないなどという私たちの注文を受入れてもらった上、私は出ないというのでは、何やらうしろめたい気分にもなり、そのことも気が重い。

三、家庭訪問

A子のおちこみが近ごろひどい。いつも動き出しの遅い子で、周囲の子がやり始めたのを見て、それからやっと教科書を開きそのページをさがすというような子なのだが、彼女の書いてくる日記は、細かな所まで目のゆき届いた楽しい文が多いことをみれば、感性は豊かに持っている子ではある。以前から授業中、夢想するような表情でぼんやりしている

ことはあるのだが、近頃それがますますひんぱんになってきた。

A子の父は、健康食品などの訪問販売の仕事をやっていたが、数ヶ月前に倒産して、多額の借金をかかえているという。先月からA子は、業者が学校で販売している学習雑誌の購読もやめ、給食費も口座引落しではなく、その都度現金で納入するようになっていた。家の電話もとりはずしてしまった。母親は夕刻から近くの食堂（兼一杯飲み屋）に働きに出ていることは、A子の日記で知った。狭い地域だから、A子の父の倒産は、当然親の間の茶のみ話になり、子どもたちの耳にも届く。「おまえの父ちゃん、今何しているのだ。」「弟は保育所へ行くのをやめたんだってな。」というような悪気のない周囲からの問いかけも、今のA子にはせつなくひびく。以前から動作がのろいということで軽んじられることも多

かったA子は、身をかたくして小さくなり、ますます反応の遅くなるA子をかからかう男子も多くなる。

今日のA子は、体育のミニバスケット班対抗試合で、ボールの来ない方へ方へと動き、パスされたボールにも手を出そうとしなかったので、試合後しきりに責められて泣いていた。もうそれとない注意では、A子の学級内での居場所確保できなくなっている。何とか打つ手を探さねばと、帰りがけA子の母親の職場を訪ねてみた。

せまいカウンターに座ってラーメンを注文すると、「あら、先生」と声がして、母親が奥から出てきた。「A子さんの様子をお話ししたくて来たのですけど、こんな所で話していいですか……。」と切り出すと、母親は、「今はお客さんが少ないのでどうぞ……。」と言いながら、もうすでに目をうるませている。学校で

のA子のおちこみは、当然母親にも見えている。気にはかけているものの、何もしてやれないのが不憫でという母親の気持ちが痛いほど伝わってくる。

「先生のおっしゃる通り、近頃の朝は、気が重そうに登校していくのです。親の失敗であの子には不自由をいっぱいかけているのに、学校でまで辛い思いをしているのかと考えるとせつなくて……。」

私のこの仕事は四時からなので、夕食は食べられるようにはしてくるのですが、弟たち三人にごはんを食べさせ、あとかたづけをして——それはしてないことも多いのですが——風呂呂に入れて、弟たちをねかせて、十一時頃の私の帰りを待っているなんてことを五年生の子にさせて、こんな親なんてないと思うのですけど、今はあの子が頼りですから……。お客がなかなか帰らなくて、

十二時をすぎないと店を抜けられないこともあるのですけど、走って家に帰ってみればあの子たちは私を待ってこたつでねこんでいることもあるのです。宿題もちゃんとやりなさいなんて、とても言えないのです。」こんな現実をかかえて、A子は教室にいたのだった。おぼろげながらわかつていたとはいえ、母親のこの話を聞くまでは、A子の教室での夢想が何なのかまでは見えなかった。ましてクラスの他の子どもたちは、A子のこの現実には知らない。

二年生の弟と、まだ入学してない妹・弟と三人の面倒を見ながら夜をすごしているというA子の姉さんぶりを知れば、子どもたちのA子への認識は変わり、その対応の仕方もちがってくるはずだ。あすの朝は、このことをクラスの子どもたちに劇的に知らせなければならない……帰りの車の中で、私はしきりにそう思

った。

翌日、学級朝会で、私は切り出した。

「君たちの中で、夜一人で留守番をしたことがある人はいるだろうか。小さな妹や弟をあずけられて、ごはんを食べさせてやったことのある人はいるだろうか。君たちは家に帰れば王様だ。母さんが君たちの世話を一切してくれる。たまに一人で留守番をしても、たまに妹たちのめんどろをみてもらってはほんの一時のこと、普段は君たちは父さん母さんにあたたく守られ、世話をうけている。みんなも知っての通り、A子さんの家では事業に失敗して倒産した。今の世の中では、事業をやっている家ではどこでも、倒産という不安をかかえながら必死で働いているのだが、あちこちで起きている倒産が不幸にもA子さんの家を襲った。倒産というのは、大きな借金をかかえて

事業が続かなくなってしまうことだ。A子さんの両親はその借金を返すために必死になっており、A子さんも当然それにまき込まれている。A子さんが近ごろ学校で元気がないことは、みんなも知っている。でもその原因が何かは知っていただろうか。はずかしいことだが、先生も知らなかった。

きのう、A子さんのお母さんに会って話を聞いて、先生はびっくりした。みんなが夜のんびりテレビを見ている時、A子さんは一人で妹たちに夕食を食べさせ、そのあとかたづけをし、みんなを風呂に入れてねかせつける。それを毎日の仕事にしているのだ。

学校ではちょっと動作がのろく、スポーツも不得意なA子さんだけでなく、家に帰ればお父さんお母さんを助けて、みんなにはできないことをやっている。そんなA子さんの、学校に

いる時とはちがう一面も知ってはしいのだ。家でのA子さんは立派な大人として、お母さんを支えているのだ。……」

こんな話を聞く時の子どもたちの目の色はちがう。時々A子の方にチラチラと目をやりながら、私をくい入るように見ている。A子とは言え、この話を出すことを私はA子の了解を得ないまま始めてしまったのだが、A子の目はそれをすでに許すように笑っている。

その日からA子の表情はあきらかに明るくなった。と同時に動作も早くなる。終会で、「今日一日で楽しかったこと」なども発言するようになる。子どもの変化は、まことに単純明解だなと思う。

私の気づかないでいることに気づかせ、子どもへのとり組みの姿勢を変え、契機になる家庭訪問、それも楽しい仕事である。

四、不本意な労働も

私は職場では研究主任である。年度はじめに、「授業を気軽に見せあおう。不得意なこと、今困っていることをとりあげて、みんなで高まろう。」との原則を合意した上で、何を研究の対象にとりあげようかとアンケートした所、同僚の意向は、国語と道徳に二分した。道徳の授業時数の確保が点検を伴う形で要請されている中で、いよいよ逃げられなくなってきた状況の反映だろう。

校長の指導もあって、結局は道徳をとりあげることにはなったが、徳目の匂う(臭う)資料を与え、子どもたちのタテマエの話しあいはどううまく授業としてまとめるかの研究では、何となくうさん臭く、気が進まない。

子どもの生の現実、その中で生じ

ている問題を直接とりあげるか、それと結びつける方途を考えなければと模索はしたが、私の工夫と力が足りず、結局は副読本に載っている資料をいかに印象深く子どもに与えるかという方向に全体は流れていった。それでも研究主任として、今年の仕事のまとめをしなければならない。これは気が重く、したがってはなはだ能率のあがらない仕事になった。

教育という本来のやり甲斐、手ごたえのある仕事——たとえそれがうまく進まない時であっても、それなりの力み甲斐のある仕事に、子どもの成長とはかわらない部分(時には成長を阻害するような部分や、不本意だけれどもやらされている部分が入りこむこと、それをどう排除していくかを考えるのも、教育労働の一部である)、私には思える。

(さとう もりまさ Ⅱ南魚沼郡大和町・

藪神小学校)